

平成23年度 第3回道徳教育について考える会 協議概要

日時：平成24年2月7日

12:50～16:20

場所：県立津山東高等学校

協議題

- (1) 異校種間の交流・連携の在り方
 - ・ 県内の道徳教育実践研究事業推進校の交流・連携の取組
 - ・ 体験活動を通じた交流・連携の在り方 等
- (2) 「『心豊かなおかやまっ子』育成」の表の検討

協議前：県立津山東高校の道徳教育に関するホームルームの時間の授業参観



← 1年間の様々な活動を振り返り、成果や自分に身についた力を考える。

グループで分担して考えたことを一人ずつ先生役になって発表し、グループで共有する。 →



〔津山東高等学校の取組〕

- ・ 道徳教育を考えていく上で、体験は大変重要な位置を占めている。体験は、自分の立ち位置を見つめ直すよい機会になるとともに、世代の違う人たちとのコミュニケーション能力を育てる機会でもある。
- ・ 社会貢献活動を通して、それぞれの科のよいところをつなぎ合わせて、全校の取組にする。そのために、自分一人で行える活動ではなく、他の人と協力しないとできないような活動を取り入れ、人とかかわり合いながら生きていくために、必要な力をつけていくことができると考える。
- ・ 体験活動のあとには、ホームルームの時間や活動後の時間で振り返りの機会をもち、意義を見つめ、自信と誇りをもってほしいと願っている。

(1) 異校種間の交流・連携の在り方

《県内の道徳教育実践研究事業推進校の交流・連携の取組》

- ・ 参観日の全学級での道徳の時間の公開授業の案内を、中学校区の全学校園に送付したところ、よい情報交換の機会になった。
- ・ 中学校区で、道徳教育のキーワードを決めて実践に取り組み、道徳の時間の授業参観や授業研究会などで方向性を共有し、同一歩調で道徳教育を進めている。
- ・ 中学校区での人間関係をスムーズにするために、中学校区内の小中学校の同学年同士で、学期ごとに1回程度の交流を行っている。
- ・ 中学校区内の学校園で、道徳教育推進協議会を立ち上げた。道徳教育推進担当の教員が集まり、道徳教育についての共通の取組について、話し合いを行っている。今年度は、「あいさつ運動」に取り組んだ。

《異校種間の連携の在り方について》

- ・ 連携については、「継続性」と「同一性」が大切。つまり、一つの対象と継続的にふれ合うことが有効だと思われる。柱となる取組を決め、年間を通して何回も繰り返すことによって、相手とのつながりができると思う。繰り返しの活動でも、1回の活動ごとに振り返りの時間を取り、生徒たちが改善をして次の活動につなげていくと、活動に深まりや広がりが出て、自己肯定感や自己有用感がもてるようになってくると思う。
- ・ 自分の気持ちを表す表現力や、受け手の気持ちを考える想像力を、就学前からきちんと育てる必要がある。そのためには、人と人とのかかわりを大事にした連携を考えないといけない。その中で、保護者とも忘れずに連携してほしい。
- ・ あるフォーラムの講演の中で、「もっと感動、もっと感謝」という言葉があった。心が動

かされることがあって、感謝の気持ちをもつことが、人を育てる上では最も大切なことではないかと思う。これを学校間での連携に置き換えると、異なる高校が何かの活動で出会っても、とにかく心動かされる何かがないと、子どもたちは動かないと思う。

- ・ 学校間の交流・連携は、ややもすれば教員主導になりやすい。大事なものは、心と心がふれ合うということ。
- ・ 幼稚園・小学校・中学校は、それらに通う子どもたちが同じ学区で育っているため、連携がよくとれている。しかし、高校になると難しい。高校が連携を模索するとしたら、地域のコミュニティだと思う。高校の近隣の幼稚園や小学校、中学校との連携が、一番やりやすいのではないか。
- ・ 同世代がどんなことを考えているのか、どんな学びをしているのか知らないことが、意外と多い。学区を越えて、いろいろな高校の、同世代の仲間とお互いに知り合い、一緒に活動する機会をつくる必要がある。連携は、ピンポイントではなかなか図れないので、連続性をもって続けていかないといけない。
- ・ ぜひ、ノーマライゼーションの教育をお願いしたい。連携先に特別支援学校や作業所といったところも加えて、子どもの偏見や差別のない目で社会を見て、みずみずしい感性で感じ取ったことを周りの人たちに伝えてほしい。もちろん、就学前から、発達段階に応じた豊かな感性を育てることを前提としているが。
- ・ 世の中に、いかにいろいろな人がいるかということ、経験や体験を通して感じ取り、理解してほしい。感受性豊かな子どものうちに、ぜひいろいろな人たちと、一緒に活動する体験をさせてほしい。そのためにも、小・中・高校の子どもたちと、特別支援学校の子どもの交流・連携のきっかけをつくってほしい。
- ・ いろいろな人たちと交流を重ねることにより、子どもたちは、心地よい体験を積み重ねることができる。心地よい体験を積み重ねることにより、身近な人に優しくできたり、思いやりをもって接したりできる子どもに、育ててほしいと願っている。交流する際には、活動する視点を明確にして、打ち合わせをする必要があり、次に生かすためにも、活動が終わって反省会をもち、お互いに感じたことや気がついたことを出し合える時間が、貴重であると感じている。
- ・ 異校種間連携とはいえ、何か一緒に活動すれば、道徳性が身につくというわけではない。活動の意義づけと振り返りが大変大切で、交流や連携に、心の教育につながるふれ合いを少しでもいいから加えることによって、意義のあるものになると思う。
- ・ 異校種間というと、小中とか中高という異年齢を思い描いていたが、高校同士などの同じ年齢での交流・連携は新しい視点である。また、地域との交流や連携、校内の交流や協議も大事である。
- ・ お願いしたいことは、全ての交流・連携の体験を「生きる力」につなげてもらいたいということである。交流や連携、様々な体験や人とのかかわりを通して、生きていくスキルだけでなく、どんな場面でも力強く生きる「心」を育ててほしいと思う。

(2) 「心豊かなおかやまっ子の育成」の表の検討

- ・ 道徳的なものは、積み上げられていくものではなく、小さい頃の方が純粹で、道徳的ではないかと思っている。道徳性は、段階的に育っていくものではなく、教育を受けることで理性的にはなると思うが、行ったり戻ったりしながら育つものなので、一直線に育つものではないことが分かるような、表の示し方をしてほしい。
- ・ 子どもたちの育ちは、一直線ではない。子どもたちは、行きつ戻りつしながら、成長していると考えられるので、決して、縦に積み上げていくものではないと思うけれど、図柄から、そういう印象をもってしまうこともあるので、考える必要がある。
- ・ 道徳性は、積み上げてきた一つ一つが単体ではなく、相互作用によって育っていくという感じがする。岡山県の目指す子ども像と、1対1で対応しているような表し方は、違和感がある。
- ・ この表に書かれている道徳性は、それぞれの発達段階で身につけられたらいいこと。こういう育ちをしないとだめだということではない。
- ・ 人間の道徳性は、ここに書かれているものだけではなく、たくさんある。表に書かれているのは、その中から岡山の目指す子ども像に向けて、抜き出したものである。就学前の姿から、教育によって、人格の完成を目指すという大きな目標のもと、どの段階からでも目指していけるようなものにしなければいけないと思う。